

《書 評》

Henrik Mouritsen, *Politics in the Roman Republic*

London: Cambridge University Press, 2017, Pp. Xii+214.

竹 中 絢 音

古代史における基礎的かつ重要なテーマを扱うシリーズ, Key Themes in Ancient History の一冊として, 本書は刊行された。ギリシア・ローマ史及び関連する分野に携わる教師・学生へ向け, 研究の現状のみならず, 扱われるテーマがいかに我々自身にとっても重要かを示すと銘打たれたこのシリーズを構成するに相応しく, この書の目指すところもごく基礎的なものとなっている。

著者の Henrik Mouritsen は現在ロンドン大学キングス・カレッジで教授を務める。共和政期のローマの社会・政治史に関心を寄せ, イタリアの地域的な政治・社会構造については, 特にポンペイやオステリアでの事例に取り組む。著作に後期共和政ローマにおけるプレブスと政治の関係を扱ったものがある他, その関心は奴隷制など広範に及んでいるが, 特に民衆の役割について注目していることは, 本書の構成からも見て取れる¹⁾。

本書はそのタイトルが示す通り, ローマ共和政の政治について論ずる。上述の通り基礎的なテーマを扱うが, ローマの政治すべてを示そうとするのではなく, 政治制度, 政治の場面での実際の慣習を解き明かすことを主題とする。ローマ共和政研究においては, 特に制度の面に注目した数多くの取り組みがあり, 様々なモデルが提示されてきた。本書はそうした研究の成果を一方では活用しつつ, また一方ではそこに定着している観点, 定義, 解釈を, 事例や史料の読解を通じ見直そうと試みる。

目次は以下の通り。章を大きく分け, 小見出しを付けることで内容理解を助ける構成となっている。

序章: Introduction

第一章: *Senatus Populusque Romanus*: Institutions and Practices

Polybius and the Roman Political System / Cicero's *Res Publica* / 'The Power of the People': The *Comitia* in the Roman Republic / 'Religion' and 'Politics' / Voting and Assemblies / The 'Struggle of Orders' and the Evolution of the Roman Political System / The *Comitia Centuria* / The Reform of the *Comitia Centuria* / the *Centuria Praerogativa*: Lottery and Elections / Breaking the Rules: *Ambitus*

第二章 : Leaders and Masses in the Roman Republic

Popular Participation / 'Saying Yes': Voting in the Popular Assemblies / From *Comitia* to *Contiones*: the Rise of a New Paradigm / *Comitia* as 'Civic Rituals' / Audience and Communication at *Contiones* / Why Did the Romans Hold *Contiones*? / The *Contio* in the Late Republic / Leaders and Masses: the 'Political Culture' of the Republic / Epilogue: Politics and Military Expansion

第三章 : Consensus and Competition

Narrative and Periodisation: the Making of the 'Classic' Republic / Before the 'Fall' / Inventing the 'Populares' and 'Optimates' / Sallust: Politics without 'Optimates' and 'Populares' / Politics without 'Parties' / Sulla and the Tribune / Content and 'Style' in Late Republican Politics / Popularity in the Late Republic / Discourse and Ideology / The End of the Republic

序章において、著者はまず形式的な手続きを重視するローマの政治の性格、それが政治的混乱をきたした時代においても変わらないことを特筆する。支配の合法性を確保するものとして、ローマ人は手続きの遵守を求めた。しかし、その合法性の根源であるはずの *populus* (民衆) の形式上の重要性と、実際の政治で彼らが持ちうる影響力の差は、政治的な慣習と制度的な原則の間に不調和を生み出した。著者は、自身が過去の研究²⁾ によって見出したこのローマの政治システムの矛盾について、政治システムがその内部にいる者たちによって疑問視されることは少なく、しかし部外者、特に現代の我々の目には不合理に映るという前提を置く。政治制度とその運用にはローマ人独自の権力と合法性に対する概念化が見て取れるが、権力の所在を明らかにするにあたり、我々はローマの政体に不可欠であったものの曖昧さに直面する。見出される矛盾や捉え難い性質が如何なる論理によるか、それを明らかにするには、我々自身の政治システムへの先入観を改める必要があるというのである。

続く第一章「元老院およびローマ人民: 制度と慣習」では、著者は制度とその根底にある原則に着目する。ローマの政体を構成する民会、元老院、政務官の役割と相関は、形式と実際の差異、権力の分配と運用といった点で疑問を提起する。このうち、特に民衆の力については、未だ議論の揺れ動くところである。ここではまずローマの政治制度に対するアプローチとして、最初にポリュビオスとキケロの制度モデルが概観される。そして、各民会、特にケントゥリア民会の詳述を通じ、著者は形式上この上ない重要性を持つ *populus* の影響力と、彼らが現実には置かれていた状況を明らかにする。そして共和政を形成した時期であるとして身分闘争に遡り、闘争を通じ行われた制度改革を「民主的」な制度の導入とする見方に見直しを求めている。

「主権者」とされるローマの民衆について、その役割が確かに多くの点で決定的である一方、民衆によって動かされる決定機関である民会は、実際はそれを主宰する政務官の多大な影響下にあった。民衆は受動的で、民会の開催、進行、そこで扱われる議題に至るまでが主

宰者により統御されていた。立法や選挙などの手続きは、常に自由な *res publica*（国家、共和国）を守るため遵守されてきた。しかし、ローマ人の奉ずる *res publica* が公的なもの、*populus* に関係する事柄の全てとして、意味の上で民衆に帰される一方、民衆がその限らない権威を行使する方法はなかった。民衆が参加し、合意を示すことが自由な *res publica* を唯一担保したにも関わらずである。民衆が決定を下すことによりその対象に合法性を与えるのは、民主政的な原則によるのではなく、そこで正しい手続きが遵守されること、まさにそれによってであった。著者は第一章でこのように論じている。

第二章「ローマ共和政の指導者と大衆」は実際の慣習に着目し、日々ローマの政治において何が起きていたのかを明らかにしようとする。第一章に続き、著者は権力の所在と民衆の影響について論じ、民衆が及ぼした影響力により一層焦点を絞る。

著者は最も基本的な問いとして、「どれだけの人が民衆に参加し、それは誰で、どのように投票していたのか」を置く。この点から民衆を見たとき浮かび上がるのは、開催場所の規模の小ささなどにより民衆の手続きが民衆の参加を自ずと制限するものであること、参加者が決定を求められる事柄それ自体を拒まなかったこと、この二側面である。民衆での参加者数は政治の合法性にとって取るに足らぬ問題であり、制度的概念、立法の基盤としての *populus* と、投票に参加した人々とは、完全に一致するものではなかった。民衆への参加は首都住民にとってさえ日常的なものではなく、姿が見出されるのは政治家と同じ階級に属する有閑階級の人々である。また、民衆が民衆において政治家の提案を拒否する事例は限られ、彼らの期待された役割とは元老院の利益に基づいて行動する政務官の提案を批准することだった、と著者はいう。

民衆についてと並行して、政治プロセスへの理解において重要性を増す *contio*（集会）についても考察がなされる。近年の研究に見られる *contio* の理解は、ローマ人による *populus* の定義を額面通りに受け取ったもので、実際に参加した民衆の姿が加味されないまま *contio* が民主政の原則の表れとされている、と著者は考える。政治家が *contio* で民衆に訴えた理由を解き明かす試みは、制度が観念的に、また現実的に有した意義を明らかにしようとする。「誰が誰に、なぜ語ったのか」、*contio* の研究の出発点と著者が見做すこの問いもまた、史料に遍在する制度的な虚像としての参加者と、実際に参加していた人々の姿の食い違いに迫るものである。

指導者と大衆の関係を理解する鍵としては、指導者の側の自己意識とその構成が取り上げられている。*nobilitas*（官職貴族）の出現によって、支配階級は競争を通じその地位を確保しなくてはならなくなった。転じて高位官職を得ることが支配階級であることを意味し、*populus* の投票のみが彼らの地位を決定したことは重要である。*populus* への尊重が *nobilitas* の理想的なあり方に組み込まれ、*honor*（榮譽）と *dignitas*（価値、威厳）の源としての役割が *populus* には残されることとなった。また、中期共和政が安定の時代であると同時に拡大の時代であることを留意し、この拡大が指導者と市民の関係に軍事的な領域を持ち込んだ

と著者は主張している。

対外的成功により安定した共和政が、その実力主義ゆえに競争の激化と個人への権力集中を阻みきれず、個人の卓越がエリート層のみならず *res publica* 全体を揺るがしてゆく構図の確認ののち、第三章「合意と競争」においては、ローマの政治システムそのものがどのように共和政の終焉へ至る経過に影響したのかを探ってゆく。

著者は内乱とその結果としての元首政の到来までの間、権力の共有に成功した共和政のシステムについて論ずるよりも先に、時代区分及び *optimates* と *populares* の二分モデルについて、その分類の現れる史料の背景から根本的な見直しを行っている。多くの場合転換点とされる前 133 年のグラックス改革は同時に、*optimates* と *populares* という政治家の分類の現れた時機ともされるが、分析はこの分類がそもそもいかなるもので、双方の語が指す対象はどういった政治家なのか、について踏み込んでいく。政策、動機、人脈など、様々な観点での分類が試みられてきた研究史の概観、史料に対する改めての読解は、我々の目を幾重にも覆う先入観を剥がしていくが如く進められる。

貴族政はその内部の協調に基づき、権力の共有を原則としていた。護民官による拒否権の行使が多くの場合高い権威を有する議員の干渉により取り下げられたように、元老院は支配階級の分裂を仲裁する役割を負った。元老院における議論、投票の形式化は、その構成員間の合意に依拠しており、分裂が生じそれに対処しきれない場合、元老院には為す術がない。著者は、それが前 133 年の危機に起こったことであるとする。この出来事は偶然にも貴族的共和政の弱点を露呈させる結果となった。共和政後期に見られる政治的競争の激化に伴う政治家の規範からの逸脱を、著者はローマの拡大とともに富が流入し、エリート間で富の不均衡が生じていた当時の経済的現実への当然の反応と見做す。権力の分配についての規範が共和政後期には軽視され、それが共和政の機能を万全ではなくしていった。共和政の終焉を単一の出来事を契機とせず、多くの出来事、多くの要素の絡み合った偶発的な出来事であったとしつつ、最後に共和政の没落への経過に対する後 91 年の同盟市戦争の重要性が特筆される。ローマは同盟市の人的資源に依存していながら、彼らに対等な権利を与えず、貴族政はその存続を揺るがす重大な問題の平和的解決に失敗した。このように論じてきた著者は、初代皇帝の登場をイタリア人が事実上古き貴族に取って代わった瞬間と位置づけ、本書を締め括っている。

巻末には参考文献目録と索引のほか、ローマ共和政の政治システム、指導者と大衆、政治の慣習の三部類で参照すべき研究の紹介があり、ローマの政治について深く学ぼうとする者に有用である。

共和政についての研究の膨大な累積に加わる一冊として、本書はその属するシリーズの目的に見合い、概説的な内容でありつつ多くの問題を提起し、様々な関心を読者から引き出すものとなっている。全体を通じて目指すところが基礎的である一方、制度の変遷や具体的な

事例の考察、第三章においてなされる共和政の盛衰の議論は、細部に踏み込んだものであり、ローマ史の大まかな流れについての知識を前提とする。そのため本書はこれ一冊でローマ共和政全体を知るものではなく、完全な初学者向けではない。しかし、基本的な知識を有し本書を手にした読者には、共和政史に未だ着目すべき点が多くあることを感じさせる。随所で見られる過去の研究への言及はそれぞれごく簡潔であるので、巻末の先行研究の紹介はそれを補うものでもあろう。

本書の全体から見出される著者の基本姿勢として、ローマ共和政の民主政的性格、民会や *contio* が民衆の力を代表するものとする見方の否定がある。過去の研究で既に主張しているように³⁾、彼は繰り返し制度上の民衆と実際の民衆を区別し、その相違が政治にどのように作用したかを強調する。形式上、民衆は立法や政務官の選出、戦争の是非を左右する。民会は決定機関であり、政治家たちは民衆の意思を望む方向へ動かすべく努力せねばならなかった。こうした構図は Millar により提示された⁴⁾ 共和政の民主政的側面として、強い影響力を持つものである。著者にとって重要なのはこの構図を無効とすることではなく、この構図は確かに言葉の上で存在するのであるが、ローマの民衆はそれほどの力を行使するすべを持たなかった、と示すことであろう。

本書は、著者の基本的立場に貫かれることで、共和政期の政治という、ともすれば散漫なあるいは概説的な議論に終始しかねないテーマが、一定の方向性を持って論じられている。著者が序章で掲げた「ローマ共和政の如き政治形態をいかに学ぶかの議論に寄与する」(p.5) という本書の目的のひとつは、達成されていると見てよい。

しかし、率直な感想を述べるならば、ローマの成功の秘密をその政体に求めるポリュビオスの理論の反転が本書の核であると述べた (p.166) 後の議論の展開は、それまでの議論が緻密であっただけに、また、本書の締め括りであるだけに、いささか性急に思われる。政治制度をクローズアップする本書の性質上致し方ないこととはいえ、限られた紙幅で内乱と共和政没落の諸相を詳述する困難さが表れているようでもある。著者は、ローマの政治についての研究は共和政の終焉を扱うことを避けられないとし、第三章の後半部をこの分析にあてた。ローマの成功の秘密を制度の外に求めるべきとしたのと同様、帝国の拡大とともに齎された変化が共和政に与えた影響を詳らかにしようとしている。市民の窮乏や軍制の変化、個人の台頭といった共和政衰退を推し進めた出来事は、複合的な原因により偶発的に起こった。そのうちから従来の評価以上の影響を持ったとして同盟市戦争を挙げるのである。共和政の終焉を述べるにあたって、議論の広がりを感じさせて筆を擱くというのは、あるいは読者の探究心を刺激するひとつの手であるのかもしれないが。

また、民衆の様相の図式が時代を通じある程度一貫したものとして描かれる一方、政治を主導する支配階級を形式上のあり方と実際のあり方といった区分で描くことには困難があるようである。ローマの政治の *optimates* と *populares* の二分による理解を、著者は後期共和政の解釈を形成したものと述べ、しかしその概念の意味、実際の重要性、政治的含意は驚く

ほど研究者間での合意に乏しいと指摘する (p.112)。optimates と populares について多くの定義を検討し、問題点を挙げ、重要な史料であるキケロ『セスティウス弁護』がそもそも特定の政治的目的のため、これらの語を再定義したものであるという分析に至って、これらの語はますます捉え難いものとなる。学術用語として概念化された optimates および populares と、ローマ人による用法、またそこに見られる現実と乖離したレトリックへの注意深い観察は、はっきりとした定義の打ち出しを避けさせさえる。概念そのものが発展し本来指すべき事象から外れたならば、それを組み直すか捨て去るかしくはないが、そうしたとき一層概念化の有用性、便宜性を痛感するという葛藤が、評者には強く感じられた。

著者は冒頭で、「政治構造やプロセスに対し我々が持つ先入観に疑問を呈するような要素への注意を引こうと試みる」(p.5) とも述べた。これは個々の制度やこのような概念についての議論において繰り返し実践されているのだが、本書が今日に至るまでの研究の推移を追う構成ではないため、我々の先入観がいかにして培われたか、先入観そのものの全体像を掴むのには手間取らせる印象がある。共和政ローマの政治の様々な要素の概念化、種々の政治モデルは、長い研究の成果故に入り組んで、それ自体把握しきるのに努力を要する。ローマ人自身による概念化や、彼らが現実に対処せねばならなかった政治制度の有り様を浮き彫りにせんとする分析を通じて、著者は過去の成果を一方では打破し、一方ではこれに拠って立つ。その姿勢は、原点に帰る基礎的な取り組みであると同時に、確実に研究の成果の上に立ってこそ得られる視点の最大限の活用でもある。

クリエンテラ論や民主政的側面の議論などを通過し、ローマ共和政のあり方について両極の見方が既に提示され、現在の研究者はより妥当な立ち位置を探ることを強いられているかのような印象がある。そのようななかで本書が示すアプローチのあり方は、ひとつの模範ともなるのではないだろうか。

注

- 1) <https://www.kcl.ac.uk/artshums/depts/classics/people/academic/mouritsen/index.aspx>; <https://kclpure.kcl.ac.uk/portal/henrik.mouritsen.html> (2017年9月21日閲覧)
- 2) Henrik Mouritsen, *Plebs and Politics in the Late Republic*, London: Cambridge University Press, 2001.; 'The incongruence of the power: the Roman constitution in theory and practice', in *A companion to Greek Democracy and the Roman Republic*, ed. D. Hammer. Oxford: 146-63., 2015.
- 3) Henrik Mouritsen, *Plebs and Politics in the Late Republic*, London: Cambridge University Press, 2001.
- 4) Fergus Millar, 'The political character of the classical Roman Republic, 200-151 B.C.', JRS 74: 1-19., 1984.; 'Politik, persuasion and the people before the Social War', JRS 76: 1-11., 1986.